
東方神隠し

キャットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方神隠し

【Zコード】

Z0166M

【作者名】

キャットマン

【あらすじ】

神隠し。それは山が何かを隠してしまうこと。人間は山を恐怖し畏敬した。そしてその思いが一人の神であり、妖怪であるものを生み出した。神すらも隠してしまった神隠し。それを恐れた神々に封印されてしまった。しかし長い長い年月と共に封印は緩んでいった。そしてついに封印は解かれた。

長い封印により失った記憶を取り戻すために、暮らしていく。

第零話（前書き）

初めましてキャットマンです。
今回が処女作となります。

オリ主で、原作準拠な点はほとんどないと思います。
作者は原作の知識はかなり乏しいです。ほとんどは一次小説で得た知識です。そういうのは無理。と思う方は『戻る』を押してください。

それでも大丈夫。という方はどうか読んでやってください。
よろしくお願いします。

神隠し

それは人々の自然に対する畏怖、畏敬から生まれた。

山や森に入った人が、忽然と消えうせる。

山や森は異界に通じるといわれ、消えた人々は皆、異界に行つてしまつたと思われた。

それは異界へと通じる道に迷いこむこと。

神隠しは何も人に限つた話ではなかつた。

神隠しは神すらも迷つてしまつた。

迷つてしまつた道の名は神籬。

神籬は異界と現世の端境、結界

そこは全てに等しい世界へと送る道。

道の先には何もない世界。

ただ真っ白の世界。

全てを包み込み、白く消してしまつ世界。

出入りできる者は、神籬に住まう神であり、妖怪である異端な案内人のみ。案内人は山に迷いこんでしまつた者を、怒りに触れてしまつた者を等しく神籬に送り、その先に案内してしまつ。なぜならそれが存在理由だから。

太古の神々、人々は恐怖した。

死後の世界ではない。まったく異質な世界に送る案内人を。

そして拒否した。存在させることを。

しかし、それを作在を消すことはできなかつた。

なぜならそれは、人が想い、畏れ、敬つてゐる山そのものであつたから。

神の力を持つても打ち滅ぼすことはできず、道に迷つてしまつ。しかし神々は諦めなかつた。

倒せないなら、封じればいい。

神々は現世との道を封じた。

案内人は神籬に封じられた。

案内人は抵抗をしなかつた。

あくまでも山の案内人。

山に対して害をなさないのであれば、それは排除するべきものではない。

案内人は拒まない。拒否をしない。

案内を頼むならば、案内をし、拒むなら何もせず、道に迷つものをただ傍観するだけ。

通じる道が無いのならば、案内するべき者がいないのであれば、ただそこで待つだけである。

再び道が通じるのを。

案内すべき者がやつてくるのを。

記憶を失いながらも、案内人は眠りについた。

これにて神隠しは終わつた そう思われた。

神々にとつての神隠しは終わつた。しかし人々の神隠しは終わつていなかつた。

山への畏怖は新たなものを、生み出してしまつ。
生み出された物は天狗、鬼、化狐など妖怪となり、人間を山や、
里に降りて襲う。

人間は過去に起きた神隠しを忘れ、新たな神隠しを恐れ、新たな神を望む。封印を施した神々の役目を忘却し、信仰を失い消えてゆく。

そして誰もが気づかぬうちに、再び道は繋がり始めた。

神々が消えて、道を閉ざしていた門の門が外れはじめ、門は開きかけ、案内人の眠りは覚め始めていた。

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどこの 細通じや

天神さまの 細道じや

ちつと通して 下しゃんせ
御用のないもの 通しやせぬ
この子の七つの お祝いに
お札を納めに まいります
行きはよいよい 帰りはこわい
こわいながらも
通りゃんせ 通りゃんせ

第零話（後書き）

反省はしてる。そして後悔もしてる！

緑に覆われた世界。

世界の中心に巨大な楠が鎮座している。

楠には注連縄が巻かれ、その中心にはボロボロになつた、『封』と書かれた札が貼られていた。

楠を中心に、榊が周りを囲み、鳥居が四方に立ち、鳥居の先に続く道は白い靄によつてなのか、ぼやけて先を見通すことはできなかつた。

その世界の中に一人、楠に寄りかかるものがいた。

薄い緑色の着物を着て、中性な顔立ちであり、傍目は男のようであつた。

「んつ」

それは体を震わし、眼を開けた。

寝ぼけ眼をこすりながら周りを見渡す。

「さて、ここはどこだい？」

言葉の深刻さに比べて、表情に悩みは一切なかつた。

むしろ我が家にいるかのことくの表情であつた。

おもむろに立ち上がると、正面の鳥居から先の道を手指して歩き始めた。

道の先は白い靄が、手を伸ばせば手が見えなくなるほどに覆いつくしていた。

しかしそれは一切の迷いもなく、ただ真つ直ぐに歩き続けた。

いつの間にか道と森を区切つていた榊は消え去り、その後ろの木々も白い靄に包まれていた。全てが白に染まる世界。

その中を、それは首を傾げながらも、一切不安げな様子を見せずに歩き続けた。

「ここを歩いたような気がするけど、いつのことでしょうかね」

常人なら気が狂つてもおかしくないくらいに、何もない世界。

生き物の気配はなく、無音。

自分の足音も、どこかに吸い込まれたかのように消えていく。

自分が真っ直ぐ歩いているのかすら、わからなくなる。

常人がそんな世界に長時間いても平静を保てるか？

答えは否だろ？

そんな中それは、平然と歩き続けていた。

長い間歩き続け、気づいたら再び榊が生い茂る道を歩いていた。うつすらと見える枝分かれした道全てを知ってるかの？とく、分かれ道を迷いなく選んでいく。

道の終点は、最初の広場だった。

鳥居をくぐった先は、注連縄が巻かれ、札が貼られた楠があつた。どうやらぐるりと一周してしまったらしい。

「やつぱりここ、知ってる気がする」

それは楠を眺めて呟く。

自分の記憶との齟齬に混乱しながら、楠の下に歩み寄り見上げる。

楠は巨大で、葉が生い茂り、頂点は見ることはできやうになかった。

楠はまるで、あらゆるものをおぼし込むがごとく雄大だった。

葉が擦れる音は心地よく、幹から香る匂いは体を暖かく包み込んでいた。

楠の雄大さにそれは母のような暖かさ、父のような雄大さを感じ、幹に抱きついた。

その瞬間、ボロボロだった札が剥がれ落ちた。

札が楠が剥がれ落ちた時、光がそれを包み込んだ。

それは光を感じると、眼をつむり、さらに強く楠に抱きついた。光は広場全体を覆っていた。

そして光が消えた時には誰も居なくなっていた。ただ葉が擦れあう音だけが響いていた。

山の麓には大きな神社が建っていた。

その神社の名は洩矢神社。

ミヅヤクジを束ねている、山の神を信仰している。

そこでは、その山の神を中心とした王国が存在していた。

その日、信仰の対象である山の神諏訪子は、神社の奥の間にて、お気に入りの帽子を深くかぶり、顔を隠して眠っていた。

その姿は子供の体と合わせて、神の威信はまるでなかつた。

諏訪子の横では、巫女服姿の女性が待っていた。

暖かな陽気に逆らわずに、惰眠を貪っていた。　いやー春だ

ねえ。この麗らかな陽気。楽しまなきゃ損というもんだね。

窓から差し込む光を浴びて、うたた寝を楽しんでいた。

しかし、春の陽気を忘れるほどの異質な空気が、諏訪子の体を通

り抜けていった。

諏訪子は文字通り飛び起きた。

両手を床について、まるで蛙のような座りかたをしながら、窓の先に広がる山の奥を見つめていた。

「諏訪子様？　いかがしました？」

諏訪子の動きに驚いた巫女が聞いてくるが、諏訪子の耳には入っていなかつた。

諏訪子は瞬きもせずに、山を見つめていた。

なんだい今のは？　いきなり山の中から流れてきたよ。妖怪？

確かに妖気はあるけど、それはいつものことだしなあ。

「ねえ巫女さん。あの山の先に何があるかしつてる？」

諏訪子は窓の先に広がる山の奥を指差した。

諏訪子が人に対しても質問するのは珍しくない。子供らしい容姿の為か、好奇心旺盛でわからないことを何でも質問している。

しかし山のことに関することはなかつた。

諏訪子は山の神であり、山のことなら人間が知りうることのできないことを全て知っている存在なのだから。

「あそこまで深いところまでとなりますと、入ったものはいなか
と。なにより諏訪子様が一番ご存知かと」

巫女は指さされた山を見つめながら応える。

この答えは当然である。

妖怪がいる山に、不用意に奥深く入ることを禁じているのは諏訪
子なのだから。

「あははは、そういえばそうだったねえ」

諏訪子は山の神として、山の事を把握することができる。
しかし、謎の空気を発している場所は何もわからなかつた。

ただ、気圧差がある扉が開いたのように、ある場所から勢いよく
流れていふことだけはわかつた。

やれやれ。面倒なことはきらいなんだけどねえ。

溜息をつきながら、再び山の奥を見つめ続けた。

そんな諏訪子を、巫女は不思議そうに見ていた。

第壹話（後書き）

原作キャラがあらわれた！
作者は混乱している。

光に包まれている間、緑色の着物を着たそれは、懐かしさに包まっていた。

それはとても遠い日のことであることを、頭の片隅でわかつてゐる自分がいることに、それは驚いていた。

自分は過去の記憶を失つてゐるのを理解した。

「まあいずれ思い出すでしょう」

口の中で小さく呟き、光が収まるごと、閉じていた両目を開いた。そこには光に包まれる前の場所と似ていた。

巨大な楠を中心とした広場。

四方に建てられた鳥居。

長い時間風雨を受けてか、といひにいひが崩れ落ちていた。鳥居の先に白い靄はない。

整然と生え揃っていた、榦もなく。木々が乱雑に生え、道と呼べるようなものはなかつた。

「さてと。ここは本当にどこだらう？」

目覚めた時の場所も忘れてしまつたらしく、記憶になかつたが、体が覚えていたような気がした。

忘れてしまつたこの場所の記憶と、現状が違いますぎることによつて混乱している感じだ。

抱きついていた楠から体を離し、改めて辺りを見渡す。

辺りは木々が生い茂り、周りからは葉の擦れる音の他に、生き物たちの気配が充満していた。

それら皆が、自分を歓迎しているようにそれは感じていた。

相も変わらず、理解できない感覚と記憶の齟齬に多少困惑も、不安はなかつた。

「？」

草木を踏みしめる音が聞こえた。

それは決して四足歩行の生き物の足音ではなかつた。走つてゐるかのような足音は、一直線に近づいてくる。

それは身構えるわけでもなく、ただ自然体のままで、足音聞こえる方向を眺めていた。

草の根を搔き分けて現たのは、子供だつた。

幼い顔立ち、小さな体は華奢で弱々しく見える、黒い羽を背に生やした少女でだつた。

少女は満身創痍であつた。

肩で息をして、着ていた服は、枝に引っ掛けたのか、ところどころが破けてる所、焼け焦げている箇所があつた。そこから見える肌には、枝で切つたのか赤い線がはしり、火傷していた。背中に生えた羽は、毛羽立ち、焦げたような後があつた。

少女は緑色の男にも、女ようにも見えるそれに、眼があつた数瞬、驚いたような表情が浮かべたが、それは懇願の表情に変わつた

「お願い！ 助け

その言葉の後で続くであろう言葉は、何かが少女にぶつかつたのが阻まれてしまつた。低い音がなり、それと同時に、少女が弾かれたかのように転がつた。

突然のことに、それは驚きながら、少女に駆け寄つた。

少女の背中の肌は衝撃で変色し、火で炙られたように焼けただれ、生えていた黒い羽の片方が半ばで折れ、力無く垂れ下がつていた。少女は意識を失つたのか、浅い呼吸を繰り返すだけで、閉じた瞼を開けようとしない。

いつたい何が、と思いながら、先ほどまで少女が立つていた方向を見た。少女が立つていた方向からは、再び何かが、こちらのほうに歩み寄る足音が聞こえてきた。

足音は先ほどの少女のとは違ひ、木々を踏みしめながら、こちらに近づいてきているようだつた。

「やつと追いついたべ、まったく、まだ餓鬼の天狗のくせに逃げ足だけは速い。でももう無理だべ。ここいらは何故か結界が張られて

壁になつて行き止まりだべ」

木々を踏みしめながら現れたのは、頭を上に向けなければ、頭が見えないほど、でかい一つ目巨人であった。

「おる。お前ら何で結界の内側にあるんだべ？ あれ結界がないべ」

巨人は一つ目を器用に動かして、一人を視界に入れた。

「へい姉ちゃん。お前は結界が解けた理由を知らんかい？ この子を飛ばしたのは君かい？」

「私は男だ！ 私は気づいたらここにいたから知らん」

自分でもびっくりの即答であった。目の前にいるのは異質な物。だが恐怖まったくなかつた。あるのは驚きと疑問。

そして自分が男であることを始めて自覚した。しかし、自分の名前が思い出せないでいた。

「まあそんなのどうでもいいべ。確かにその餓鬼を飛ばしたのは俺だべ」

「何故そんなことを？」

男は巨人に問いかけた。

男は何故かこの巨人の行動に対し怒りを感じていた。巨人がやっていることは、無力の子供に対して全力で殴りかかっているようであつた。

まったく解せないな。なぜ私はここまで怒つているんだ？

このような少女だからか？

男は天狗といわれた少女を見た。少女は相変わらず気絶しているらしく、つらそうに呼吸を繰り返していた。男は拳を強く握りしめ、怒りを心の中で膨らませた。

「なにいつてんだべ、お前。俺たちみたいな下等妖怪が、自分より強い妖力を持つ者を食べて強くなるうとすんのは当然だべ。まあ普通は無理だけど、たまに餓鬼のくせに強いやつがいてな。そいつらを食うんだべ」

巨人は、天狗の少女を指差しながら応えた。

男は巨人の言つたことが、信じられないでいた。自分の目の前にいるのは、妖怪である、目の前の少女が、一つ目の巨人と同類であるといつてているのだ。さらに少女の力は巨人より強いが未熟ゆえに、補食の対象となっているのだ。

男は呆然となりながら少女を見ていた。視界の隅に赤い塊が入った瞬間、少女を抱き寄せ、後ろに飛び下がつた。

赤い塊は地面に当たると、土を抉りながら爆発した。

飛ばされた土に混じつた石が、男目掛けて飛んできたが、石はまるで計つたかのように皮一枚のところを通りすぎていった。

その幸運に感謝しながら、男は少女を抱えたまま、巨人と距離を取りつた。

「なんでかわすんだべ？」

「危険だとわかってるものに当たらなきやならんのだ？」

「どうせ、その餓鬼は食うんだだから関係ないべ」

巨人は指差しながら言つた。

「そういうお前は何だべ？　この森にいるんだからお前も妖怪だろうべ？」

「知らん。記憶がなく私も誰なのか知らないのだ。だからお前が妖怪というなら、きっと私は妖怪なのだろう。だがここを血で汚すのはやめてもらうか。おそらくだがここは私の家だ」

「ならお前は誕生したばかりの妖怪だべ。それに力ない妖怪が何をいつてるべ。弱肉強食。それが妖怪たちの中での決まりだべ」

そう言いながら巨人は手に靄のようなものを集めると再び赤い塊を放つた。

男は少女を庇うように背中を向ける。背中にはしる衝撃を歯を食いしばつて耐える。

先ほどの少女のように背中は焼けずに、ただ衝撃がはしつただけであつたが、その衝撃だけでかなりの痛みだった。

男は少女を抱えたままでは動けないと悟り、少女を自分の背後に置いた。そしてその少女を庇うように巨人の前に立ち塞がつた。

巨人は男のそんな動きが面白いのか、大きな口をいびつな形に歪めた。歪められた口の形は嘲笑であつた。

「あほだべお前。お前がするべきは今すぐここから逃げることだべ。でもまあもう逃がさないべ。お前から殺してやるべ。そしてその後にゆつくりあの餓鬼を食うべ」

男はその言葉を聴いた瞬間に動き出した。少女はが背後にはいるとかわしたときに当たる可能性があるからだ。

男の動きに合わせて巨人は赤い塊を連射する。

男は小刻みに前後左右に動きながら、塊をかわしながら、接近する。懐まで入り、肘を巨人の腹に叩き込む。

「いつてえなあ！」

言葉の裏腹に利いてる様子はない。巨人は先ほどとまで変わらず塊を放つだけ。男はそれを確実に見切つて接近しては拳や脚を叩き込む。

男は困っていた。

敵の攻撃をかわすことはできているが、有効打を与えることができない。分厚いに肉が壁となつて衝撃を吸収しているのだ。

巨人は自分の攻撃をちょこまか動き、かわされ、懐に入ってくれば効きもしない打撃を繰り返すさら、苛立つていた表情となつていた。

「蠅みたいにちょこまかかわすんでねえ！ もういい先にあの餓鬼だ！」

そういうと巨人は氣絶したままの少女目掛けて腕を振りかぶった。男の眼には、先ほどまでとは比べ物にならないほどの靄が腕に巻きついていた。

あれはまずい！ と思つと同時に男は少女の壁となるべく駆け出す。

巨人が振り下ろした腕から撃たれたのは巨大な塊だつた。今までとは比べ物にならない危機感感じながら、男は少女を庇うために、体を大の字にして立ち塞がつた。

「ガハッ！」

男は巨大な塊を受けて尚倒れなかつた。脚が振るえ、いつ倒れてもおかしくないが、男は立つていた。

巨人はその姿を見て驚いた表を浮かべた。

「お、おまえ何で立つてられんだべ。俺の一一番強い技だべ！」

「その程度の攻撃で倒れるほど、柔な妖怪じやないつてことだろう。見掛け倒しの低級妖怪君」

男は震える両脚で起ちながら、巨人をにらみつけながら馬鹿にした。

「お前ほんとに妖怪だべか？ 妖力が少ないくせに妙だべ」

「知るか。先に私を妖怪といつてきたのはお前だらうが」

男は震える脚を叱咤しながら立ち続ける。だがもはやそれも限界に近く、気を抜くを倒れてしまいそうだつた。

巨人はそんな姿を見てにやりと笑うと、再び腕を振りおろし、巨大な赤い塊を放つた。

顔目掛けて飛来する塊を見て男は、まずいと思いながらも男の脚は動くことを拒否した。そして脚は限界を向かえ、膝をついた。しかし膝をついたため、塊は目標を見失い、男の頭上を通り過ぎ、後ろ鎮座している楠に命中した。

瞬間。

男は心が闇に包まれた。

怒り、怒氣、憤怒、怒りが心を包み込んだ。

巨人はそんな男の心にうちの気づかずに近づいてくる。

「やつと倒れたべ。まったく無駄にしつこいからこうなるんだべ」

巨人は男の頭を掴み上げた。

男は目を瞑り、力無く両腕両脚を垂らしていた。

巨人はそれを見てにやりと笑うと、大きな口を開けて男を口元に運ぶ。

ブチ。肉を引きちぎつたような、耳触りな音が響いた。

第3話（後書き）

天狗の少女をオリキヤラにするかどうか

第参話（前書き）

「おひこ」になつた

巨大な楠の広間から遠く離れた山の中。

諏訪子は体に苔をまとわせた猪と向き合っていた。

猪は器用に膝を折り曲げながら、諏訪子に頭を下げた。

「急に呼び出してすまないね」

『諏訪子様のお呼びなのですから、参上しないわけにはいけませぬ』

猪は諏訪子の部下である土着神だった。部下の土着神は、森を警邏し、己の主たる諏訪子、信仰してくれる人々に対して、悪意持つものの排除の任を承っていた。

「ん~そんな畏まらなくていいのに」

『そういう訳には参りません』

猪は人語ではなく、ただ鳴いているだけだが、諏訪子は問題なく理解していた。

「むう、まあいいや。今日森に異常あつた?」

『異常ですが? 私は特に。いつも通りでしたが』

『急に変な気配を感じたり、風が降りてこなかつたかい?』

『はい。何も』

諏訪子は手を顎の当てて首を傾げる。

それに合わせて諏訪子が被つてる帽子の眼も悩んでいる眼に変化した。

諏訪子が今いる場所は山の奥深くだ。自分が風を感じたのは山を降りた麓の中にある神社の中だったが、風を肌で感じとっていた。同じ部屋にいた巫女は何も感じ取れなかつたので、この猪に期待していたのだ。

しかし、山の奥深くにいたものが、何も感じ取れなかつたつしている矛盾。

山のふもとにいた自分が感じ取れ、山にいた人ではない、神の一

種である土着神が感じ取れなかつたのだ。

『あ、一つだけ感じ取れたことがあります。なんか山が喜んでいたような感じでしたよ。こんなのは初めてです!』

山が喜んでいる。

それは諏訪子も山に入つてから感じ取れるようになつた感覺だつた。

それは明確な感覺ではない。山には顔も口もないのだから。だが山の神である諏訪子は山が確かに喜んでいるのを感じ取れていた。

山に着く者には理解できず、山の上、同等の私には理解できる感覺。はじめて感じることのできた山の感情? うー考えるのは苦手なんだけどねえ。

帽子を押さえながら山を眺めて諏訪子は嘆息した。帽子の眼もたれ眼になり、どことなく情けなく見える。

何か来る!!

諏訪子は山の変化を敏感に感じ取つた。その気配はあの時感じた氣配に似ていたが、これには明らかな悪意に似たものが混じつっていた。

山は暗いものに包まれた。

傍目は何一つ変わつていない。

山に通ずるものだけが違ひを感じ取つていた。

先ほどまでの喜びは消え去り、正から負に移り変わつていた。

憤怒。

山は怒り、木々が怒る。

『す、諏訪子様!? 一体どうなつたんですか!? 山が怒つてしまふよ!?』

猪はでかい団体を支える脚を震わしていた。

諏訪子も初めての体験だつた。

山は何も訴えかけてこない。木々の感情は理解することができても、山は何も言つてこないので。

山の神である諏訪子は感情が無い、もしくは自分が山の感情であると思っていた。神であり化粧でもある自分が。

しかし違つた。

山の感情は封じられていたのだ。何重にも、山の神である自分ですら感じ取れないほどに。

今、山の感情を封じていたものは消え去り、そして何者かが山の逆鱗に触れてしまったのだ。

こりや不味いかもね。

諏訪子は山の怒りの矛先である、山頂の向こうに広がっているであろう森を思いながら深いため息をついた。

肉を引きちぎる音。ドサリと何かが落ちる音。
巨人につり下げるられた男の耳に確かに聞こえた。
しかし男は、その音が何なのか考えもしなかつた。考えれなかつた。

そして男は相変わらずつられた体制のまま、自分を掴む指を軽く握る。

軽く力を込める。

ブチ ドサリ。

男は巨人の腕から解放され、音もなく着地する。

男は巨人を見る。掴んでいた手の指は3本。反対側の指の数は5本。

巨人は何が起きたのか理解できていないのか茫然とした表情で、千切れた自分の指を見ていた。

「やっぱり見かけ倒しの肩妖怪か」

男は吐き捨てるように言う。

その表情には何も映つていなかつた。

「 - - - - - ! ! !

巨人は声をかけられたことによつて、ようやく現状を理解した。理解するとともに痛みが襲つた。

巨人は千切られた手を押さえながら、地を転がる。

男も現状を理解できなかつた。

自分の意思とは関係なしに体が、口が動く。心は怒りに覆われ、眼の前にある物を壊したくてたまらない。頭に記憶が流れ込もうする。理解できない記憶が頭痛をもたらし、それがさらに苛立ちを倍増させる。

男は巨人に歩みより、軽く、まるで道端の石ころのように蹴り飛ばす。

巨人はまるで石ころにまけたように飛ばされる。

「アガ！」

飛ばされた巨人は、後にある樹木に当たり跳ね返る。巨人は必至の想いで立ち上がろうとするが、再び蹴飛ばされる。

「フフハハハハ」

男は笑いを止められなかつた。止めようともしなかつた。

眼の前で石ころに転がつているのは、先ほどまでこちらを見下し、痛みつけ、食い殺そうとしていた物だ。

それが今では塵芥のごとく転がつているのだ。

転がり続けようやく止まると、巨人は体を震わしながら立ち上がつた。

その眼には恐怖が宿つていた。

男はその眼を見て、再び笑う。

声は広間の中を包み込む。木々はその声に合わせてかごとく葉を擦らせて、不気味な音を鳴り響かせる。

巨人は葉が擦れるたびに首を左右に動かした。

「おい。俺を、私を、我を食うんだろ小童が。後ろにいる餓鬼の天狗を食うんだろう」

口から響く声は、重く、年季を感じさせるような声だつた。

しばらく首を左右に動かしていた巨人は、千切れていないほゞの手を使つて指差す。

「お、おまえは、な、なんだべ！？ なんなんだべ！？」

恐怖に駆られてか、巨人は同じような質問を繰り返す。巨人は狙いもつけずに赤い塊を発射してきた。

狙いもつけずに撃たれた塊はまるで弾幕のように男の正面を覆う。それを見た男は、まるで空気の上に座るかの様に浮き上がつた。脚を組み、男は右手を上に上げた。

右手を上げると同時に、地に落ちていた葉が舞い上がる。舞い上がった葉はその場で浮遊し、赤い塊にぶつかつた。

勝敗は、葉の圧倒的勝利であった。

葉は舞い上がった状態のまま浮遊していた。風が吹くたびにゆらゆらと揺れるが落ちる様子はない。

巨人は突き出した腕をそのままに、固まつていた。

脚は枝が貫き地面と縫いつき、体全体を薦が這い廻り、徐々に締め付けていた。

「た、助けてくれ。も、もう絶対襲わないべ・・・・・だから」
巨人の命乞いを聞き、男は興ざめたような、いいことを思いついたような不可思議な表情を浮かべた。

「ほう、命乞いか。まあ助けてやらんでもないぞ」

男の言葉に、巨人の顔に希望が浮かぶ。男はその表情を見て、笑みを作る。

「だが君はそんな体でどうするのかね？ 時間が経てば治るとは思わないほうがいい・・・・・お前は山の怒りに触れたんだから。山の枝で貫かれた脚はいずれ腐れ落ちるだろう」

男の言葉にあわして、枝がさらに深く突き刺さる。

「そうすればお前はどうなるかな。見たところお前は屑妖怪の中でも中々の力を持つてるようだが、もし脚が腐れ落ちれば餌だな」

その言葉にあわせて、薦が首を絞める。酸素を奪い、正常な判断

能力を奪う。

「徐々に手脚の先からぬつくりとぬつくりと食われるのを抵抗することもできず見つめているだけなんだよ」

巨人の顔は酸素不足の為か、それとも己が食われる姿を想像してか、紫色に染めあがつていつた。

「そこで君に提案がある。全ては平等な世界へ行きたいと思わないか？そこは襲われることもなく、己が他を襲う必要もない。何も心配することのない世界」

その言葉に巨人はすぐさまに首を縦に振った。

男は壯絶な笑み浮かべた。とてもうれしいのだ。己の本懐を果たせることが。男は歓喜に満ちた声をあげる。

開門『全て等しき白き世界』

巨人の眼の前に真っ白な光が生まれた。そこから出てくる白い靄が巨人の体を包み込んだ。

白い靄に驚いたが、巨人はすぐさまに幸せそうな顔になつた。数瞬後、完全に白い靄に包まれて山から消えた。

「全て等しき白き世界。飢えも死も、あらゆる苦しみの無い世界。動くこともなく、息することもない、生き物として生きる必要性の無い世界。そこは神、妖怪、人に差はない」

男は小さく呟いた。顔には笑みが消えていた。

男は天狗の少女を楠の根元まで運ぶと、力尽きたように眠りてしまった。

第参話（後書き）

なにこれひどい。

主人公凶暴化。山のことに関することなどでは特に凶暴化します。
しかし、ここまで凶暴にするつもりはなかった！

感想ありがとうございました！

第四話（前書き）

「おやぢですか？ 原作ってなんだー？」

そんな作品ですか？ 暖かい眼で見てやってください

風が頬を撫で、樹より離れた葉が当たった感触を感じながら男は眼を覚ました。

日は高く昇り、葉の間から光が程よい暖かさとなつていて。横になっていた体を上半身だけ起こして、頑なった体を解すように、首を回し、両腕を前と後ろに回す。回すたびに骨がコキコキと鳴つた。

眼を覚まして、男が一番に思い出すのは、さつきの巨人との戦いだつた。

途中から記憶が……曖昧になつてゐる。まるで強引に蓋をされてるような。目覚める前の記憶と同じ感じになつてゐる。

巨人の指を引きちぎつた後の記憶が曖昧になつていた。

蹴り飛ばしたのはしつかりと、巨人が使つたような能力を使つたのは曖昧に、最後の瞬間。巨人を倒したと思われる時の記憶は一切無くなつていた。

まるで消し去つたかのように。

男はため息をついた。予想外な形ではあつたが、記憶が戻つたような気がしたのに、再び記憶を無くしてしまつたのには、多少虚しさを感じてしまつた。

ため息をついた男は自分の着物を掴む小さな手に気づいた。

小さな手の持ち主は天狗の少女だった。

天狗の少女は小さな体を丸めながら、手だけは器用に男の着物を掴んでいる。

男は少女の怪我の様子を看よつとした。少女は昨日、巨人の攻撃によつて背中を焼かれてしまつたのだ。

丸くなつた少女の背中は、焼けただれたりはしてはいなかつたが、背中は赤く火傷したようになつてゐた。木々で切つたと思われる服の下は、綺麗な白い肌が見えていた。

これが妖怪の力かと思ったが、少女の特徴である美しい毛並みを持つ黒い羽の半身は、毛羽立ち、羽が抜け落ち、半ばで折れて垂れ下がっていた。

そして男はあることに気が付いた。
自分の体に一切傷がないことに。

おかしい。昨日巨人が言つてたことが正しいならこの少女のほうが回復速度は速いはずだ。なのに私のほうが速い。何より服に泥もなにも付いてないってどういうこと？

少女は体を震わして、男にさらに抱きつくなづな形になつた。
着物に押し付けたところからは、悪い夢を見ているのか、うめき声をだし、田尻からは小さな零が着物に染み込んでいった。
男は少女の頭を撫でようとしたが、ギリギリ上で止めてしまった。
男は怖かった。

少女の頭を巨人のようにに潰してしまおう。白い何かに変えてしまいそう。

「 ムウ」

男が撫でるべきか悩んでいると、少女眼を覚ました。

少女は眼を擦りながら辺りを見回して、最後に自分寝ぼけたまま抱きついたままだった男と眼があつた。

少女は何回か瞬きを繰り返して、ようやく現状を理解したりしく、顔を真つ赤にしながら、男を弾き飛ばした。

「 あやややや。なんですかあなたは！？ 私を食べようとする妖怪の仲間！？ ハツまさか私みたいな幼女に興奮する変態ですか！？ この変態妖怪！」

少女は言葉を弾幕のように撃つ。そして少女を中心に旋風が起きる。

「 幼女で興奮する妖怪は鬼に蹴られて死ねばいいのです イタ！」

旋風に合わせて飛び上がる少女は、羽ばたこうとしたが、折れた翼は動かず痛みを発し、バランスを崩して地面に墜ちてしま

つた。

男は少女から眼が覚めてからの行動の速さに驚いていた。そしてなにより、

『幼女好きの変態』と言われたのが心に響いていた。

私は変態なのか……いや私は決して変態ではない！

言葉が心を抉るあまり、一瞬世界が終わつたような想いになつたが、少女が地面に墜ちると、我に返つて駆け寄つた。

「大丈夫ですか？」

男は少女に手を差し伸べた。少女は自分の羽が折れていることにようやく気づいたようだ。

少女は己の羽を恐る恐る触れ、上下に動かそうとする。

羽は力無く垂れ下がるだけで、少女の意志に応えてくれる様子はない。

少女は羽を動かすたびに、目尻に貯まり始めた涙は地面に落ち始め、無表情だった顔は悲しみと痛みで歪み、閉ざされていた何かが決壊したみたいだった。

少女は声に出して泣きじゃくつた。

男はそんな少女を見て、ただ無言で頭を撫でた。優しく、少女が泣き止むまで撫で続けた。

不思議と、さつき感じたためらいは一切無かつた。

しばらくの間泣き続けた少女は、落ち着きを取り戻し、赤くなつた眼を擦りながら頭を下げた。

「その、ごめんなさい。助けてもらつたのにあんなこと言つて」

口調はさつきとは違い、一言一言をしつかり口に出す話かただつた。

頭を上げた少女の顔には、申し訳なさと、恥ずかしさが入り混じつたような表情となっていた。

「気にしなくていいよ。それより君はなんである巨人に追われていたんだい？」 その間に少女は、つらそうに顔をしかめた。

「いや、すまない不躾な質問だつたな」

「あややや。違うんですよ。どうやって話したらいいかと悩んでたんですよ」

男の言葉に、少女は慌てたように、前に出した両手をバタバタと動かす。

「私は本当は別の山にいる天狗でした。ですが、その山が突如襲われて」

「襲われた？ さつきの巨人みたいな連中か？」

「わからないのです。私はそこから少し離れた場所にいたから。私はそこから逃げ出して、ここまで来る途中襲われて、そして……」

少女は悲しそうに、自分の意志で動かない羽を優しくさすった。

「あの！ 次は私が質問していいですか？」

空気が重くなるのを感じてか、少女は笑顔を作つて、明るい口調で訪ねた。

「私は鴉天狗の射命丸しゃめいまる 文あやです」

文と名乗った少女は、男が名乗るのを期待に満ちた眼で見つめてきた。

それに対しても男は困っていた。男には記憶がなく、名前がない。

どうしたものかと悩んでいると楠と（眼があつた）

楠にはもちろん眼はない。男には楠に語りかけられてる確信があった。

「つた。

「あの」

「私の名前は 久くくく能智のうぢ 楠くすのだよ。よろしく」

楠は文に向つて手をさしだした。

「はい！ よろしくお願ひします！」

少女は花のような笑みを浮かべ、楠の手を握った。

二人は手を上下に何度も動かした。

「ククノチさん。聞きたいのですが、どうやってあの巨人を倒したのですか？ 何かの能力ですか？ それとも何か隠された力が！？」

文は掴んだ手を引きよせて、楠に詰め寄った。

興味を持ったことを明らかにしないと、落ち着かない性格である文にとって、眼の前にいる楠は興味の塊になっていた。

楠もそのことをすぐに理解した。

「落ち着いて射命丸。ちゃんと応えるから。その前に一つ聞きたいだけ。文の眼から見て私はどんなふうに見える？ 後楠でいいよ。ククノチつていいにくいでしょ」

詰め寄ってきた文を落ち着かせて、少しだけ体を離す。

文の問いかけ前に、一つ楠に気になることがあった。心のしこりのよう残っている言葉。

『ほんとに妖怪か？』

楠は自分が妖怪だと思っている。妖力も少ないが感じている。だが、ほんとに妖怪かと問われると、楠自身首を傾げてしまつよう違和感も感じていた。

「私も文でいいですよ。妖怪だと思うよ。妖力は少ないですけど。でもこの辺一体には変な気配がするね

「変な気配？」

楠は当たりの気配を探るよう神経を張り詰めるが、森の生き物以外に感じることはなく、敵意も何もなかつた。

文自身もよくわからないのか、しきりに首をひねつていた。

「妖怪の気配に何かを混ぜたような。ん～！ 言葉ではうまく言えないです」

文は、言葉にできないもどかしさを感じてか、眼を閉じて、歯切れ悪く応えた。

「それじゃ仕方ないね。それじゃ文の質問の応えるね」

楠が言つと、文はさつきまでの悩みは頭のどこかに飛んで行つてしまつたように、再び飛びかかってきた。その表情は好奇心の塊に

なっていた。

「まず巨人を倒した時なんだけどね。頭に血が昇つてたせいか、記憶がないんだ」

その応えを聞いた文は、数瞬だけ肩を落としていたが、すぐさまに復活した

「では能力は？」

「まずその能力ってのを教えてほしいんだけど。能力って何？」

楠の問いに文は驚いた表情を浮かべた。楠の言葉が信じられないようだった。

しかし楠には驚かれた表情を見せられても苦笑するしかない。

楠はつい昨日に目覚めたばかりであり、記憶もなく、妖力にいたつては、巨人との戦いのうちに感覚的に理解しただけであった。相変わらず記憶の齟齬は感じていた。

「説明不足だつたね。私はつい最近目覚めたばかり。君がここに来る少し前だよ」

「あややや、そうだつたのですか。それは予想外です」

文はそういう手を振った。

その瞬間、楠の顔を風が撫でた。

今現在、森にはほとんど風が無く、決して自然に起きた風ではなかつた。

楠は驚いた。眼の前の小さい少女が手を軽く振つただけで、肌に感じるほどの風が起きたのだから。

「今のが私の能力です『風を操る程度の能力』です。ですが私はまだ天狗になつたばかりの子供なんで、まだ全然使いこなせてないんですね」

「妖力は巨人より多いよね。天狗になつたばかりつて？」

「さつき言いましたけど私は鴉天狗。鴉から変化したんです。鴉としては長生きなんんですけど、妖怪としては、まだまだ子供で、妖力があつてもうまく使えないんです」

楠は文の言葉で巨人が文を狙つていた理由を改めて理解した。そ

して今後も狙われ続けてしまう可能性がある」とも。

「でもさつき体を飛ばしたよね。あの時はすごく力強く感じたよ」

「あの時は……眼の前に楠さんの顔が驚いて、感情の高ぶりで予想以上の力がでたんです。感情の変化で妖力の強さは変化しますから」文は恥ずかしそうに頬を染めて、小さく呟くように応えた。

楠はその変化に気づかないで、そうなんだとうなずくだけだった。

「うん能力かわからないけど、覚えてる限りでは、いつもやつたら葉っぱが舞い上がったよ」

そう言いながら楠は右手を上に挙げた。

すると落ち葉や枝が、楠の思ったとおりに舞い上がった。それはふらふらと揺れてはいるが、確かに滞空していた。

楠は巨人との戦いを思い出した。

あの時は巨人の赤い塊を全てはじいていた。自分で当たったからわかるけど、あれはかなりの衝撃をともなってたけど、それを全て無傷にはじき消したんですねこれ。

楠が物思いにふけっていると、文は興味深げに葉っぱを掴んでる動かそうとした。しかしそれは、左右に一定の距離以上には絶対動こつとはしなかった。

文はむむむ……と唸りながら、葉っぱをにらみつけていた。

小さな少女が浮いている葉っぱをにらみつけている姿は、どこかなごむ光景である。

「たぶんこれが私の能力だとは思うんだけど。一体どういう能力なんだろう」

「む～たぶん『葉や枝を操る程度の能力』だと思いますけど……生意気な葉っぱですね。こうなつたら！」

文はどうやっても動かない葉っぱに腹をたてたのか、腕を振り上げて能力を発動させた。

風が巻き上がり、落ち葉や枝が舞い上がり視界を覆い尽くした。さっきまで浮いていた葉っぱも空高く舞い上がったように見えた。文はどうだ！　と言わんばかりに胸をはる。しかし頭に葉っぱを

乗せている姿はひどく子供らしかった。

楠は文の初めて見せた子供らしい行動に微笑んだ。

文は目覚めてすぐには悲しみの表情を見せたが、それをすぐさまに隠すしたりするのは、子供のやることではなかつた。

その後も楠と文は、文が質問して、楠が応えるというのを繰り返した。

時に、能力を試したりしながら一人は長い時間を一緒に過ごした。気がつくと高く昇っていた日が木々の隠れ、森の中は大分暗くなつてしまつた。

文はそのことに気づくとどこか悲しそうな表情を浮かべる。

「楠さん、ありがとうございます。こんな時間まで付き合わせてしまつて」

その言葉は楠の予想通りであった。

日が暮れるにつれて文の表情は徐々に暗くなつていた。楠はすでにそのことに気づいていた。

「まあ落ち着つけ。ここから去るつもりみたいだけど、どうするの？」

「わかんないですよ。でもここにいるとまた私を狙う妖怪がきますし、私にはもう帰る場所はないです。たぶんもうみんな……」

文は絞り出すように楠は微笑みを向けた。

楠は文が言いたいことを理解しているつもりだ。

ここにいるとまた楠に迷惑がかかると。

そんな文を楠は優しく頭を撫でた。

文は驚いた表情を受けながら楠を見た。

「なら私を頼りな。たぶんけど私は文より長く妖怪として生きてる。妖力は私のほうが弱いみたいだけど、君を食べようとする下等妖怪くらいなら倒すことはできる

「でも……」

「それにその羽では逃げることもできないだろう。そんな子供を放つておけるような妖怪じゃないみたいでね私は

「でもでも……」

文は眼に涙をためながら何かを言おうとするが、それは言葉の途中で途切れてしまう。

「それに私は他の妖怪に絶対襲われない場所を知ってるから」「えっ？」

小さく呟いた文の手を握り、楠は楠くすのきに手を当てた。

「文、眼をつぶって」

「は、はい」

文が眼を力強くつぶるのを見て、楠は小さく微笑む。楠も眼をつむる。

この楠は門。その先にあるのはあの世界。

数瞬、瞼まなこに強い光を感じた。それが納まり楠は眼を開けた。その先は目覚めた時と一切変わらない明るさの世界があつた。

森の広間に鎮座する楠くすのき、崩れていかない真つ白な鳥居、榦が整然と生え揃い道を形成している。

「文、眼を開けても大丈夫だよ」

文は閉じていた眼を開けた。その先に広がる世界を見て信じられない」と小さく呟いた。

生き物は、木々だけだよ

「ここが……」

文の声は世界に吸い込まれるように消えていった。

「あの鳥居の先には絶対行かないでね。真つ白で少しも先が見えなくて、ここに戻つてこれなくなるかもしれないからたぶん、いや間違いなく戻つてこれなくなる。あそこから先はこことはまた異質な世界。

楠の想いは確信に近かつた。自分以外があそこに入ると道に迷い消滅してしまうという確信だつた。

「そ、そうですか」

文は少しおびえたような声で応えた。

「さて文どうする？ 私と一緒に暮さない？ ここには何もないから外には行く必要があるけど、でもここでいる間は襲われることはない」

「本当にいいのですか？」

「これは私のためもあるんだよ」

「あなたの？」

「私は記憶がないんだ」

文はその言葉に今日一番の驚いた表情を浮かべ、

「大丈夫なんですか！？」

詰め寄るように問う文に、楠は手を振る。

「大丈夫だよ。記憶がないつと言つても なんていつたらいいかな。とりあえず生きいくことには問題ないよ」

体が覚えている感覚との齟齬を感じてはいたが、妖怪のことなどは思い出すことができた。思い出せていないのは自分が目覚める前、記憶に蓋がされる前の自分自身の記憶だった。

でも生活に支障をきたすようなことはないし。

楠は自分の記憶に關しては心配はほとんどしてなかつた。唯一心配といえるのが戦闘に関する記憶がないこと。巨人との戦闘の記憶も強引に蓋をされ、最後に勝つた事実だけの記憶はあつたが、その過程の記憶はない。

だがそれも、おいおい思い出すだらうと楠は樂觀視していた。
「まあそれで自分の為つていつたけど、それは一人になるのがいやだつたんだよね」

「は？」

「私はどうやら寂しがり屋の性格みたいでね。それで一緒にいてくれないだらうか？」

この問いかけは想像の外だつたのか、文は表情は完全に固まつていた。

楠の言葉は本音半分嘘半分であつた。

記憶をなくして初めて会つた知り合いと別れたくないという気持

ちと、この少女を留めるためには必要だと思つたからだ。

文は固まつていた表情を徐々に崩し始め、

「あは、あはははは」

声に出して笑いだした。

涙を流しながら笑つていた。

「なにその理由？ ダメおかしくておなかが、ははは」

「そんにおかしいかな」

「ははおかしいよ。あ～おかしい。楠さんって以外とおもしろい人ですね」

楠は笑い続ける文を見て首を傾げる。

「私はいたつて真面目なんだけどな」

「真顔で言うからおかしいんだよ、ふふ」

文は「あ～おかしい」と眼にたまつてた涙をぬぐつた。

「それにこんな子供と一緒に暮らしあうなんて言つなんて、やつぱり

楠さんは変態妖怪ですね」

「そては勘弁してくれないか」

「ダメです。確定事項です。楠さんに拒否権はありません」

文は笑顔を浮かべながら言いきつた。

楠は文の笑顔を見て、変態妖怪でもいいかと思つていた。

それだけ文の笑顔は見てる人間も幸せな気分にさせてくれる笑顔

だつた。

「でも私も変わつた妖怪みたいですよ。変態妖怪の楠さんと一緒に住むんですから」

文は右手を楠に向けて伸ばす。その顔には変わらない笑顔があつた。

「よろしくお願ひします楠さん」

楠はその手を笑顔で掴む。

「よろしくな文。これで私たちは仲間で家族だ」

そう言つと楠は、掴んでいる手とは反対の手で文の頭を少し強めに撫でた。

文は撫でられながら「あやややや」小さく囁き、顔を赤く染めていた。

その日の夜、暗闇の中、広場に鎮座している楠は静かにたたずんでいた。

森の中は、夜に生きるものたちが活発に動く音、騒ぎ立てる喧騒、そのものたちから隠れるように生きるものたちの奏でる音は、外から見た暗闇の森からは想像ができないほどの生活の音であった。だが、楠が鎮座する広場はそれらの音からは隔絶されたこのように静かだった。

そんな中、木々をかき分けて進む音が広場の中に響く。

「あー疲れた。やつと見つけたよ」

木々をかき分けてきたのは特徴的な帽子をかぶった諏訪子だった。彼女は疲れた表情で森から出てきた。

諏訪子は今日一日をかけてようやくこの楠を見つけたのだった。諏訪子が座りながら見上げる楠は他の木と比べて圧倒的に大きく、離れたところ、特に上空から見ればすぐさま発見できるであろう高さであった。しかし、

なんでこんな大きい楠が飛んでも見えないのや。

山を越えて見えた森の中には、こんな巨大な木は見えなかつたのだ。

異質な気配を肌で感じながらも、この木を発見することを諏訪子は出来なかつた。

気配に近づこうとするとい、異質な気配が見えない壁のよつになつて襲いかかってきた。何度も挑戦したが無理だった。神の力で強引に行けそうであったが、森を破壊する可能性が高いので諏訪子はお

となしく森に降りてみた。

森に入るとそこは明らかに異質な世界になつていた。森の中に入つたはずが生き物の気配が全くせず、榦が生い茂り道を作つていた。それを乗り越よて進もうとすると、眼の前が真っ白になり、本能的に危機を感じて道に戻つた。仕方なく道を進むとそこは迷路のようになかれ道だれけであった。

ダメ元で諏訪子は大地に道を聞いてみた。この森に入つてからは神の力を封じられていた。それによつて飛んで脱出したくて出来ないでいた。

すると予想外にも应えが返つてきた。

『ようやく力を山の神としての力を使つたか、まったくすぐに氣づけよな山の神としての力は封じられて無いつて。今代の山の神は脳無か』

ひどく頭にくる返答であつた。まるで人か妖怪のようだつた。

『まあいいや。お前はこの異質な気配の主のとこに行かなくちゃいけない。会わなくちや行けないんだ。これは山の神としての使命だ』
使命とは？ 諏訪子はさらに大地に問い合わせた。

『今のお前は知らなくていい。いずれ知ることになる』

そして大地は目的地までの地図を頭に送つてくると黙つてしまつた。

諏訪子は山の神である自分の言つことをまったく聞かない大地を不機嫌そうになんども叩いたが、もちろん反応はなかつた。

諏訪子は泣きそうな想いになりながら、目的地向けて歩き始めた。長い時間歩き続けてようやく目的地と思われる個所が見えたと思うと、突然今まで見えていた景色が嘘だつたように消えた。

諏訪子は景色は消える瞬間、

『友となつてくれ。決して思い出させるな』

あの大地の声を聞いたような気がした。

「なんだつたんだろうねえ。なんか意味深なことを言う大地だつたねえ」

さっきまでの異質な空間とは違い、森には生き物たちの気配が充満しており、上を見上げれば星空が木々の隙間からのぞけた。

諏訪子は自分の体の内から消えていた、神としての力が戻つてゐるのに気づいた。

まるでこれじゃあ。ここに神を近づけたくない 神はここに近寄ってはいけないみたいだね。

生き物と妖怪たちはここに自由に入り出しきるみたいだった。広場には妖力の名残があつた。諏訪子にはここに神力の名残とともに現在も発せられることを肌で感じた。

出所は四方に建てられた壊れた鳥居。

そして巨大な楠の根元。

諏訪子は根元の地面を掘り返すと、すでに紙屑となつてしまつた札を見つけた。札には封の一文字が描かれていた。

諏訪子はそれを見て、ここがどのような場所なのかを理解した。

封印。それもかなり強烈なものだね。

「四方の鳥居。鳥居は神域と現世を隔絶するものだから、鳥居に込められた神力によってここ一体を神籬として現世と隔絶させて、それをこのにて札この楠に宿るものを神籬に閉じ込めたといったところかな。それが鳥居が壊れかけて不完全になつてるね」

諏訪子はわざと口に出していた。それはここにはいない誰かに話しかけるように。

「確かに私じゃないとわからないことだねこれは。確かに興味ひかれるこことだけ、今日はもう疲れたよ。おやすみ」

「巫女さんに怒られるな」と小さく呟きながら楠に根元で横になると、諏訪子は眼を閉じた。

諏訪子の言葉に反応するように風が吹いていない森の木々が揺れていた。

第四話（後書き）

天狗はせつかくなので射命丸 文さんにしました。
はつきりいつたらオリキャラでもよかつたのですが、せつかくな
で。

しかし口調などなど完全にオリキャラになつてますねごめんなさい！
原作キャラ好きな人ごめんなさい。これからどんどん崩壊する可能
性大です。

こんな時間に投稿なので誤字が多いかも……

楠が眼を覚まし横を見ると、文はいまだに眠りについていた。昨日はこの世界に入ると、文は安心したようにすぐに眠りに落ちてしまった。

家族か。

楠は昨日自分が言つたことを思い出して苦笑して立ち上がった。楠が立ち上がり文を見ると、閉じていた瞼が少しだけ開いていた。「あ、ごめんな。起こしてしまったようだね」

文は上体を起こして半分だけ開いた瞼で辺りを見渡し、そのまま寝ぼけ眼で立ち上がると、楠のほうに寄りかかるように倒れかけた。

「おつと」

倒れてきた文を楠が受け止めると、再び眼を閉じて規則正しい寝息を立て始めてしまった。

楠はそんな文を微笑ましく思つ。

大人びてるけどやっぱり子供なんだな。

しばらくの間見ていたいといつ思いにかられながらも、誘惑に抵抗するように文の体をゆする。

「起きて文。もう朝だ、と思うよ」

森の中は寝る前と一切変わった様子の無い明るさ。楠には今の時間がわからなかつた。

この世界の空は常に白く明るくて、外の世界のように太陽があるかさえもよくわからないのだ。

楠の体内時計では、日の出からだいぶたつているように感じていた。

文は体をゆすられて、ようやく眼を開けた。

「起きた？ 軽いから大丈夫だけど、そろそろ離れてくれると助かるかな」

文は合っていなかつた焦点を楠に合わせるとて何度も瞬きを繰り返して、昨日と同じように口から言葉にならない音を発しながら後ずさつた。

その動きに楠は苦笑するしかなかつた。

「おはよ文。その動きは少し傷つくな」

「いえいえ、これは楠さんの危ない性癖から」

昨日に引き続きの言葉に、楠の体は自動的に動いた。離れた距離を一息で詰めて、文の頭を軽くはたいた。

「まだそれを言つか」

「アイタ」

文は叩かれた頭を両手を押さえながらも、顔には笑みが浮かんでいた。

楠はそのまま文の頭に手を乗せて、軽く撫でる。

文は気持ちよさそうに眼を細めた。

「まったく。叩かれたのに笑うのはおかしくないか」

「なんかこういう日は久しぶりだなって」

「そうか、と言いながら楠は文の頭をポンポンと叩いた。

「さてと、これからどうしたものかな」

楠は困っていた。彼には記憶がなく、文は妖力の強さ故に狙われる。

ここに居続けるにも、水も何もない。

困った。やっぱり外に出るしかないかな。楠が首をひねつてる横で、文もひねつていた。

「う～んどうしましようか?」

お互いに妖怪としてはまだまだ駆け出しだった。

楠には記憶がなく、妖力もそこまで高くない。

文は妖力が高くもその使い方をわかっていない。その妖力の高さ故に捕食される危険性は昨日襲われたことから決して低くない。

「まずは、服をなんとかしないとねえ」

「あ、それは大丈夫ですよ。私たち妖怪は、着ている服も体の一部

のようなもので、時間が経つと勝手に直るんですよ」「ほい、と言ひながら文はその場でくるりと反転して、背中を向けた

昨日まで破けていた箇所は綺麗に元に戻っていた。背中の焼けてしまつた箇所は、飛び出している黒い羽が見えるだけだつた。

羽の毛並みは昨日までとは違い、光沢を持った黒色だつた。

「羽の調子はどう?」

「こればっかりは長い目で見ないとダメですね」

文の羽は光沢は取り戻していくも、折れてしまつた箇所は昨日と変わらないでいた。

でも、と文は小さく呟くと眼をつぶつて集中し始めた。

すると文の体が浮き上がつた。

昨日のように風をまとつて浮かんでいるのではなかつた。文は眼を開けるのと同時に地面上に降り立つた。

浮いていた時間はわずかであったが、文の顔には疲労と何かをやり遂げた達成感のようなものが表情に出ていた。

「ふう。こんなもんですね」

文は額に浮き出た汗をぬぐつた。

楠は茫然とした表情で文を見つめていた。

「……え? 羽なしで飛べるの?」

その言葉に文はあちゃーと顔を押さえた。

「そういえばそうですね。楠さんは記憶がないんですね。説明不足でした」

そう言って文は、指を立てて話し始めた。

「いいですか妖怪は基本飛べるんですよ。生まれた時から自然と出来るようになつてるんですよ」

「でも私飛べないよ」

「それは多分記憶を失つてしまつたためですよ。簡単に言つと妖力を使います」

「つまり能力を使うときとあまり変わらないってことかな?」

楠は文との昨日の会話を思い出していた。

能力とは力あるもの、人の深い畏れから生まれた妖怪たちはほぼ必ず持っている。

能力の強さは、妖怪の強さに比例するわけではないが、戦いにおいての影響はかなりのもの。

そしてそらの力を発揮するには妖怪の格がわかる妖力の多さ。これは妖怪だけではなく神も同じである。

神も妖怪と同じ生き物。妖怪は畏れ、神は信仰。どちらも人の思いによって生まれてきたもの。妖怪はそれほどでもないが、神は信仰を失うとすぐに消滅してしまう。

文は楠の疑問に頷いた。

「そのとおりです。どちらも妖怪の本能みたいなものです。ただ飛べると思いながら妖力を使うと飛べたり出来ますよ」

「それじゃあ文の羽は何の意味があるの？」

楠の問いに、よくぞ聞いてくれましたと顔を綻ばせた。

「私の羽はですね、体制を保つと共に、大幅な加速を可能にさせるんですよ……でもそれに頼りっきりだったから今苦労してるんですけど……」

自信満々だつた声は徐々に小さく呟くような声になつていいく。

「えっと……元気出して。私もこれから飛ぶ練習するから一緒にやろひ。

きつと羽なしで飛べるようになれば今以上に速く飛べるようになれるさ」

「そうですね。そうですね！ ではまず体に妖力をまとわせてください」

そう言つて文は自分の眼をつむつて集中し始めた。

楠も体に妖力が体にまとわせるように想像する。すると体は自然と浮き上がった。眼をつむっている文は、楠が浮き上がっているのに気づかなかつた。

「まとわせることが出来たら自分が飛ぶ姿を想像してください」

「もう飛べちゃったんだけど」

なるほど。確かに能力と同じだ。特に何かをする必要もなく

自然と飛べた。

楠は体を左右に動かして、飛ぶコツを掴もつとした。

文は呆然とした表情で呟いた。

「あややや。もうそんな動けるんですか」

「うん。体は覚えてたみたい。それに体が軽い」

「それは昨日より妖力が増えてるからです。といふか増えすぎですよ！」

楠は文の言葉は半分も耳に届いていなかつた。

広場の中を飛び回り、己の体の調子を確かめていた。

はは、体が軽い。

空を飛ぶのは妖怪として常識。

だが記憶を失っていた楠にとつては真新しい感覚だつた。

しばらくの間その場に滯空していると、文がゆっくりと楠の横まで昇つてきた。

「やつぱり羽がないと速く飛べないですねえ。羽なしでも速く飛べるよつに練習しなきゃダメですね」

昇つてきた文は、楠の肩に手をついて疲れを表すかのようにため息をついた。「お疲れ文。確かにこれは能力みたいなものだね」

「普通はそこまで妖力出しませんよ」「そこまで出てる？ 私としてはあんまり出してないと思うんだけど」

「たぶんですけど、急に強くなつた妖力がうまく調整できないんだと思います」楠はそつと上を見上げた。

見上げた先にあるのは巨大な楠^{くすのき}が雄大に葉を広げていた。それは空に蓋をするように広がつている。

ほんとでかいなあ。いつもやつて飛び上がつているのに頂点が見えない。

「でかいですね」

同じ様に上を見上げていた文は呟いた。

その顔には少し怯えが浮かんでいた。

「楠さん。白い靄の先が見えますか？」

「いや見えないよ。あれはあの鳥居の先も同じ様になつてるよ」

楠が指した先の鳥居の先に広がる道の奥には、空と同じ白が見える。

楠は文の手を握りながら、鳥居の上端に降り立つた。

そこから見える景色を見て文の顔には、浮かんでいた怯えに、持ち前の好奇心が強く表れていた。「どうする？ 先に言つてみる

「ううう、妖怪の本能が先に行くなと言つてるのですが、私の魂は先に行つてみたいと叫んでるのでですよ」

「決めるのは文だよ。でも私はあまりおすすめしないよ

「どうしてですか？」

「田覚めた時に一度入つてみたんだけど、何もなかつた」「何も、ですか？」

「そう何も。まずは楠が生い茂つて道が複雑に絡み合つて、迷路になつてゐる。そしてその先には白い世界。なんにもない世界。

現世に生きる、神も妖怪も人間もいない世界。そんな世界か広がつてゐる」

楠の声に感情が一切こもつていなかつた。

鳥居の先を見続けているその眼には、何も写つていない空っぽな視線。

「楠さん？ 大丈夫ですか」

楠の横顔を見て異変を感じた文が声をかけた。

「ん？ 何が？」

「いえ……何でもないです。その先には何かあるんですか？」

「反対側に通じてるよ。」ことは反対側の鳥居から出てきたから。どうする行く？」「ええ、行きますとも！ 」この不思議空間なんですから、やはり自分の眼で見てみないことには信じられないですよ

文の不思議空間という言葉に楠は同感した。

彼も疑問に感じている点はいくつもあるのだ。

何故こんなに木々が生い茂っているのに生き物がないのか。

鳥居に広がる空間は何なのか。

何故自分はここで眠っていたのか。

楠の内心にはいくつもの疑問が漂っていた。

「わかった。それじゃあ行こう。見通しが悪いから手を繋ぐよ。はぐれたら帰つてこれないかもしない」 楠は文の小さな手を握る。文も楠の手を握り返すと、一人は浮かび上がった。道に添いながらふわふわと二人進んだ。

進む先は楠が始めた時と変わらず、白い靄に包まれて先が見えない。

文は次第に顔に浮かんでいた好奇心は消えて、道の先に見える白い靄を不気味そうに見ていた。

楠が掴んでいる文の手が細かく震え始めている。
楠はその手を強く掴んだ。

「大丈夫、文？」

「はい大丈夫です。後少し強く手を握りすぎです。痛いのですが」 文の言葉が強がりだと楠はわかつていた。だから楠は強く掴んだ手を離さない。そのままの一人は手を繋いだまま、何もない白い世界との境目までやってきた。

境目に降り立ち、その先を見つめる。しかしそこから先はただ白い靄が漂い続け、奥を見通すことはできない。

二人は黙つたままその世界を見つめていた。文は体を震わし、顔も少しづつ青ざめていた。

「文、戻る？」

楠の問いかけに文は悩まずに頷いた。そして文が一步下がった瞬間。

「え、え、何？」

境目の向こうから白い靄が伸びてきて文の体を包み込もうとした。

文は突然起きた出来事に反応できないでいる。

白い靄は徐々に文の体を薄めていくように見えた。それを見た楠は咄嗟に叫んだ。

「文！ 能力を使え！」

楠の声に意識を取り戻した文は、自分の体を中心に風を巻き起こす。その風によって白い靄は散り散りになり消えていった。

楠は文を抱き寄せて、飛び上がった。しかし白い靄は再び文を飲み込もうと、靄を伸ばしてくる。

来るな！

楠は白い靄曰がけて念じた。それは能力を使つよう自然な動きであつた。靄に対して右手を伸ばして再び念じる。

来るな。彼女は迷いしものではない。

白い靄は楠の思いを感じ取つたのか、そのまま霧散して消えていつた。

数瞬の間、楠はそのままの体勢のまま固まつてしまつた。しかしすぐに抱き寄せた文の様子を見た。

文は楠の胸に顔を押し付けて震えていた。体に異常は少し見たあらようには見なかつた。

楠は小さく彼女の頭を撫で、来た道を戻り始めた。戻る最中、楠は先ほどの出来事を思い出していた。

なんだつたんだ今のは？ 僕が来た時はあんなこと起きなかつたのに。

白い靄は確実に文だけを狙つていた。握っていた手だけを避けるよつて白い靄が彼女を包み込んでいた。

そこまで思つて、ふと後振り返つた。白い靄が追つてきてはいいないかと思つたのだ。

すでにあの場所からは遠く離れており、うつすらとしか見えなかつた。

白い世界はただそこで漂つてゐるだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0166m/>

東方神隠し

2010年12月25日21時36分発行